

第98話〈亜ヒがらい〉の要約と参考資料

第98話〈亜ヒがらい〉の要約

女性の鉱山労働者は交代で、粗製亜ヒ酸を背負って急な坂道を精製場まで運ばされました。精製された亜ヒ酸は馬車で岩戸の倉庫へ。建築材、坑木、焼き木などの需要が増えると、土呂久の山林業者、製材所経営者、馬車引きなどが鉱山の経済圏にのみこまれていきました。

第98話〈亜ヒがらい〉の参考資料

98-1 亜ヒがらい

藤高チエミさんの話（1979年3月4日聴取）

反射炉の横の亜ヒ焼き窯でできた粗砒を上（事務所横）の精製窯に運ぶのを亜ヒがらいというた。鉱山に出とる女が交代でやらされた。誰もよだきいから、かろわんですわな。当番の日になると、休んでこんとやけな。そんなとき、私に回ってくる。

佐藤直さんの話（1979年3月3日聴取）

反射炉のところから、岩元から送ってきた鉱石を自分たちで詰めてかるうて上った。袋に入れて詰めて、唐米袋（ドンゴロス）だった。反射炉で余るから、上に持って行って焼いたのかもわからん。

佐藤仲治さんの話（1979年2月21日聴取）

反射炉で焼いてとった亜ヒは、橋口タマ子らが「今日は反射炉に行け」と言われて、亜ヒかろいに行った。木の箱に入れて、精製場にもって行った。

佐藤アヤ子さんの話（1978年聴取）

亜ヒがらいは一日請負い仕事で、昼までで帰ってもよかった。亜砒窯の外に積んである粗ヒをスコップですくうて、背中にかるう大きな箱に入れて運んだ。カルイのようになっている箱の、私は半分くらい、力の強い人はいっぱい押し詰めてからう。看貫（かんかん）ばかりではかって、1貫目いくらと（お金を）もらいよった。自分でかやすから、亜ヒが舞う。亜ヒが口の中、鼻の中にはいらんように、手拭をうしろばちして、口には幾重にもうしろで結んだ。それでも、私は気管を痛めた。手袋だけ、持ってきてくれた。着物なんかでも、亜ヒがつくと、すぐ穴がほげちしまいよった。髪の毛でも、いんだらすぐ洗わな、首のまわりにあれ（？）ができよった。

佐藤ツルエさん＝樋の口のツルエさんとはちがう＝の話（1979年4月13日聴取）

私はこの家（春日）から5年3か月（昭和11年から17年まで）通勤しました。勤め始めたとき、亜ヒがらいはなかった。そして途中でなくなった。

反射炉の前の橋を渡って、小屋の中に亜ヒがためてあった。スコップでトージンのような形をした箱に入れて運んだ。この箱にひもがついちゃって、重たかったですけど、がまんしてからわんと金にならん。女が交代で「今日は亜ヒがらい」とかるうて。朝行くと、名札がさがちよる。亜ヒがらいのところに「佐藤ツルエ」と書いたのがあると、それをさせられた。坂道は休まないけん。大工さんから「座り台」を5、6か所つくってもろうて、トージンをかろうたままよこいよった。下に降ろすと、あげきらん。坂道は石がでたりして、道が悪かった。「1日に10回からわにゃいかん」と言われて、力の強い人はお金がとれる。精製窯でおろして、重さをはかった。首のうしろに亜ヒが入ると、痛いやら、痒いやら、たまらんかった。白粉ぬったり、タオルを首に巻いたが、うしろから入ると、汗といっしょになって前にも流れてくる。

佐藤マサ子さんの話（1979年4月13日聴取）

200メートルくらいじゃろか。途中、よこうち登った。精製窯の前は橋を渡った。一番坑からのトロッコの道が80cm幅、橋の幅は1m80cmくらいの木の橋。小屋の中で、窯の前に広い空間があった。運び込んだ粗ヒをはかったあと、木の箱に移した。「こげなきつい仕事なら、やめた方がええぞ」と思った。女で働いたのは50人おったじゃろな。1日に5人くらいが亜ヒをからわした。

98-2 馬車引き

佐藤藤夫さんの話（1979年4月14日聴取）

反射炉の対岸から配給所の前まで、ふたなしのマイト箱（宮桜ダイナマイトと書いてある）に入っていた粗砒（粗製亜ヒ酸）を運びよった。亜ヒは重いけね。廃物利用のマイト箱（高さ20センチ、長さ60センチ、幅20センチ）に入れたのを川の東の小屋（反射炉を囲った小屋）からトロッコで積んできて、荷馬車に20箱積んで、配給所の前庭まで持って行くと、精製場の人夫（朝鮮人の徳村、金山、大川）がトロで精製場まで運ぶ。

精製した亜ヒを16貫入りの箱詰めにして配給所まで持ってくる。箱は川田時代と同じ。箱の重さが1貫、正味16貫、合わせて17貫あった。紙の内袋につつんでいて、箱には字は何もいっちょらん。角に帯鉄を回して釘付けしてある。馬が強かったけ、わしどま20個つみよった。請けで1個いくらで積みよった。金は会社の事務所からもらう。馬車に積むときは、重ねず、1段で並べた。17貫×20個、1トン以上になる。

山道が細いから交差できんわな。広いところで待ち合わせた。ガタンガタン揺るどころじゃないわな。バラスが敷いてないから、道がほげて車輪がぬかった。雨の降る日、仕

事はやらんけど、夕立がきた折は、じき道がぬかる。落立神社の下がいちばん悪かったわ。下が赤土じゃから、大きくほげて。車がぬかれば、前のシャフトが低いからつかえることあるけ、2頭かけさせな。つかえた折に、巫ヒが舞うとよ。

佐藤藤夫、谷蔵、健蔵、菊男、辰蔵、三十四（みとし、ミナトの兄）、中西喜太郎のめいめいが馬車を持っていて、坑木出し、焼き木出し……鉦山の仕事がねえときは、他の仕事をした。材木の積み出しの親方は、助さん、須賀牟田、黒木正喜、小笠原磐城、こうした親方から請ける。親方は道路渡しだから、道路まで出す。馬車になると、大将がもつ。わしどんが積んで鉦山に行けば、事務所の倉庫係が帳簿につける。月末締切で支払い。材木だったら、1石なんぼ、巫ヒじゃったら1箱なんぼ。朝早うから夜遅うまで、請けでやると月に120～130円になりよった。

昭和8年ごろ、土呂久部落に荷馬車が1台もなかった。製材所に馬車が2台、ケヤキ積みにきよった。「なんぼになるか」と聞くと、「なんぼ」ち言う。大豆、小豆、柿、カボスはならない。公民館の向こうの田もやられた。鉦山に5人（勝喜、富喜夫、菊男、芳松、藤夫）の共有山の木が売れたので、わしが「木を運ぶ」ちいうて、熊本まで馬を買いに行った。仕事しよる馬を見て、少々高くても馬と車を300円で買った。わしがた馬の仕事がよかった。3か月で人よりよく働くことになった。馬車を買った。木は、長屋をつくる建築材や坑木になった。大切な木は途中で降ろして、鉦山事務所まで運んだ。これがきっかけで、鉦山のおかかえになった。

わしがやるまでは中西喜太郎が一人でやりよった。食糧を積んで配給所にあがり、帰りに製品積んで帰る。中西は月90円の月給、わしは請負じゃけ、100円にも120円にもなる。中西が「若い者のくせに」と言いよったが、しょうがない。